令和七年八月吉日

神聖を輝かす

高嶋 善三郎

目次

●神聖を輝かすとは・・・・・・・・・・・・・・・3
●より愛深くなろう　という決意・・・・・・・・・・4
●愛は小言を言わない・・・・・・・・・・・・・・6
●和光同塵という生き方・・・・・・・・・・・・・9
●宇宙の根源に復帰できる生き方・・・・・・・・・10

お願い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウエブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。
より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。
次の連絡先にお願い致します。
（スマホ）０９０‐３３４６‐６６１９
（メールアドレス）zensan@peach.ocn.ne.jp

神聖を輝かすとは

前資料の中にもありますが、神聖を輝かすという意味について、もう少し説明してくださいませんか。

端的に言えば、私たちの天命として授かっている、愛と調和の世界を創るため、自らの想念行為を通して宇宙神の光をこの地上界に降ろすことです。言い換えれば、それは私たちの内に存在する神（本心）のみこころをこの地上界に降ろすことです。この内容を具体的に解説されたものに五井先生著の『大決意』９０ページ）があります。それを見てみましょう。

そこでは、「真実の愛とは相手のことを思いやって、相手のためになるように自分が生きることである。自分がいい気持ちになりたい、自分が気持ちいいから愛だと思うけど、それは愛情ではなく愛欲であって自分勝手なのである。自分の心が楽しむというのが先ではなく、相手を楽しませることによって自分が楽しい。相手のために尽くすことによって自分が喜びを感じている。だから真実の愛を行う時には多くの場合とても忍耐がいる」と言われています。

「イエスもいっています
主よ主よと呼ぶだけが神の国に入るのではない　と
自分の内なる神を出すということは
どういうことなのかというと
調和ということであり
愛の行いを深くなければ
いかに神様神様といっても
その人は信仰の深い人というわけにはいかない
愛がすべてのすべてなのです
愛は愛欲のことではありません
愛とは相手のことを思いやって
相手のためになるように
自分が生きるということです

愛は忍耐なりという
真実の愛を行う時には
とても忍耐がいるのです

自分がいい気持ちになりたい
自分が気持ちいいから愛だと思うけど
それは愛情ではなく愛欲であって
自分勝手なのです
自分勝手なものはすぐこわれてしまう。
真実の愛というのは
自分の心が楽しむというのが先ではなく
相手を楽しませることによって
自分が楽しい
相手のために尽くすことによって
自分が喜びを感じている　ということです
たとえば教団のために一生懸命尽くす
そのことによって歓びを感じ、ああ　生き甲斐があると喜んでいれば
それは愛です
神への奉仕は愛です
それが横に拡がってゆけば
人に尽くす
ああ　あの人はよくなったな
私の尽くし甲斐があったな　と喜ぶ
それも愛なんですね

より愛深くなろう　という決意

真実の愛を現わすためには、常日ごろから、自分の内なる神（本心）に意識を向け、「神さま何とぞ愛深い私でありますように」と祈ることが大切であり、それにより愛深き自分になり、その祈りを拡げると、世界人類が平和でありますように」という祈りになると解説されています。

「神さま何とぞ愛深い私でありますように
と祈っていますと
自然に愛の深い　巾のひろい人が出来ます
祈り言をそうしていると
自然に行いがその祈り言にかなって来ます」
「自分は神の子なんだから
立派な愛深い人間でなければおかしい
愛深い　巾の広い人間にならなければ
自分は神のみ心を汚すんだ

だから
より大きく
より巾広く
より愛深くなろう　という決意が必要です
それが信仰の第一歩なのです

自分のご利益で
自分が幸せになって
自分が自分が・・
というのでは信仰でも何でもない
ご利益信仰といって大したものではない
そういうところから入ってゆく人が随分多いけれど
究極は神のみ心をこの地上界に現わすために
自分が生まれているんだ
神のみ心とは
愛であり、調和である
だから愛をよけいに行じ
調和なるように自分が動くことが

自分の置かれた立場に一番ふさわしいんだ
というように
常に自分で思うわけです

それを簡単にいうと、
愛深き私にならし給えと
いう祈りになる
神さま何とぞ愛深い私でありますように
と祈っていますと
自然に愛の深い　巾のひろい人が出来ます
祈り言をそうしていると
自然に行いがその祈り言にかなって来ます

愛深い私にならしめ給え
という祈りをもっと広げると、
世界人類が平和でありますように
という祈り言になってきます
世界平和の祈りは

愛深い私にならしめ給え　という言葉の
もっと広がって立体化した祈りです」

愛は小言を言わない

何故小言をいうことが、愛にならないのかとうと、お互い　業につかまらせてしまい、業を押しこめてしまうからだ。業をはいであげるようにしなければだめであると指導されています。

「今までの宗教や修養というと
その人の悪きところをつかまえ
短気を直さなければいけない
妬みを直さなければいけない
意気地がないから直さなければいけない
とやるわけ
そうやることはその人の悪きところを認めさせてしまう
ああ、自分は短気でだめなんだ
自分は妬みがあってだめなんだ
自分は気が弱くてだめなんだ
というように
自分が小さな小さな業の人間になっちゃう
そうではない

あなたは神の子なんだ
生命は光輝いているんで
あなたは出せばどんな力でも出るんだ
やればどんなことでも出来るんだ
ただし
神様につながらなければだめだから
神様の中に入りなさい
神様というのは守護霊守護神としてある
祖先の悟った人が守護霊としてついている
その上に神そのものである守護神がついていて
二つが協力して
分霊の自分にいい仕事をさせようと思って
神さまのみこころを現わせようと思って
一生懸命に働いているのだから

その守護霊守護神につながりなさい
つながる方法はどうすればいいかというと
世界平和の祈りです
と教えているわけです

口でとやかく
うるさく小言を言ったってだめなのです
また業のなすままにさせておいてもだめです
業をはいであげるようにしなければだめです
業を押しこめてしまう小言はいけません
業を押しこむとはどういうことかというと
これを教えてやろうといって
対等に生命が流れてゆくのではなくて
自分が高みに立って
威張りたい心でそれじゃだめじゃないか
といったって
業と豪とのぶつかり合いですから
喧嘩になったって

なにをいってやんだ、あいつ生意気に、
こういうように思うだけで業を押し込んでしまうのです
愛でもって
相手の立場に本当になって
ああそうだな、あなたの立場になればそうだなァ
しかたがないなァ
勉強するのがいやだろうな
お父さんだって勉強するのはいやなんだ
面倒くさいから
いやだけれども
やらなければ偉くなれないだろう
一生懸命やろうよ　協力してやるよ
というふうにやれば
なんだか味方になったような気がして
勉強するでしょ
それを大概の場合
夫でも妻でも先輩でも後輩でも
みんな教えようとする

“あなた間違っているそれじゃだめじゃないの”
とこうやるわけ
間違っているといわれると
その間違ったことにつかまっちゃう
“どうせだめだ　おれは”てなことになっちゃう
業につかまらせてはだめです
業をとることをみんながやらなければならない
自分の業も消し人の業も消すのです
消すために肉体の自分では足りないから
神様の力を借りてきて
守護霊さん守護神さんよろしくお願いします
あの人の天命が完うされますように
というこころでもって
“あなたこうしましょうよ”
“私も一所懸命やりますよ”
というようにすれば
うちの家内が一生懸命応援してくれる
うちの夫が応援してくれる
うちのお母さんが応援してくれる
というようになって
自分の力が倍加してゆくわけです

夫と妻の間でも
親子の間でも
別な人間になってはだめです
生命というのは一体だから
一体の境地にならなければだめでしょ
小言というのは　はなれています
愛というのは　はなれていません

愛は小言をいいませんよ
小言をいうのは
子供なら子供を別にみる
夫なら夫　妻なら妻を別にみて
なんだ　あの子はだめじゃないか
あの夫はだめじゃないか　妻はだめじゃないか

なんだ　あんなことをして
というようにやるわけなんです
これではお互いの生命がはなれています
はなれたものだったら何もいわないほうがいいです
胸がムカムカしていうような言葉なら
いわないほうがいい

何か注意の言葉をいう時には
胸がスーッとしているときにする
ムカムカしている時には絶対にいってはだめです
一生懸命祈って
そのムカムカをまずなくして
平心になって
こころが平静になったら
“あなたこうしましょうよ”とか
“おまえこうしようよ　お母さんが一緒にやるからね”
というようにいえば
その言葉がそのまま相手に素直に入ってゆく
抵抗がなくなるわけです

自分の心臓がパクパクしているようであってはだめだ
と私はいうのです
心臓がパクパクしている言葉か
しないでいっている言葉か
ということを考えることが
大事だと思うのですよ」

和光同塵という生き方

愛と調和を自分の身を通して現わしていく方法について、老子はどのように言及されているか、見てみましょう。（老子講義第三講）

「道を治めた者は、自己の才智や能力を、あらわに出さずに、自己の鋭さを見せぬようにして、それでいて、種々な紛争や、出来事を、糸をとくように解決してゆかなければならない。その為には、自己が神の光明に輝いていても、その光明をやたらに人々に当てるのではなく、その人その人に応じなければならない。即ち柔らかい和やかな調和した光明

を常に心身から放射するようにして、どんな塵の中にいるような汚れた人々とでも、同じような立場に立って和してゆかなければいけない。つまり和光同塵の生き方である。

宇宙の根源に復帰できる生き方

また老子講義第十三講　において次のように言及されています。

「勇気に充ちた、明るい男らしい知性に秀でて積極的な態度や心をしっかり持っていながら、しかも雄の反対の雌即ち、女性的な柔和な静かな、そして謙虚な、ものを育（はぐく）みそだてる愛情を堪（た）えているような心を守っていれば、底知れぬ深い心、何人何ものをも容れ得る大寛容をもつ大人物になり得る。そのような大人物になれば、神のみ心そのもののような徳をそのままの行為として、赤児のような、自然に任せきった無邪気で素直な伸び伸びとした心でいられる。

白きを知り、黒きを守る生き方(高い真理を知り、凡愚の世界の生き方に順応して、自己も凡愚の一人となって、すべての人々の生き方を自己のものとして、社会人類の為に働いていく生き方)をして、天下の範(式)となれば、神の心の徳が充分で、肉体波動の世界の奥の奥にある、深い空の世界である宇宙神のみ心の根源に復帰することができる。

別の言葉で云えば、その栄誉を知り、繁栄の中にいながらも、辱めを受けていた頃の、まだ人の長とならなかった低い地位の頃の自己の謙虚な心がけを忘れず守っていれば、天下の谷（大人物）になる。そういう人物になれば、生命の根源の素直な世界に復帰するのだ。素朴な、本のままの姿というものは、他のものとつぎ足して使ったり、他のものの材料としてつかうわけにはゆかぬが、種々の器の元として使うことは出来る。人間的に云えば、人の下役に使われるには人物が大きすぎて使われない。

聖人が、こういう生き方をすれば、百官の長となる。このように宇宙神のみ心の根源の世界から、そのまま生れ出でているような人物は、細かい下役的な仕事をさせられることはなく、どうしても、中心人物となってしまう。その最たるものが君主であって、君主が存在するだけで、すべてが大調和してゆくのであって、君主が分割的な仕事をすることはないのだ。」

神聖を輝かせるという言葉には、私たち神人が愛と調和を自分の身を通して現わしていく上で、留意すべき点がこのように色々あることに気づきます。